【Zoom】法然上人［1133-1212］の言葉を読む　第4回　令和２年11/21（日）

　　　　　　　　　　天正寺　佐々木奘堂

●１８．　鈴木大拙著『日本的霊性』（岩波文庫）152ページ以下から

1. 『平家』にはまだ平安期の女性文化の跡が十分に残っている。日本民族の感傷性ともいうべきものが、いかにもまざまざしく見える。が、その裏にはまたこれに対しての反省が加えられている。ここに日本的霊性の自覚を感ずる。

2. **霊性的生活は反省から始まる。反省のない霊性的生活はない**のである。反省は否定である。今までは一途（いちず）に、一気に、**驀直**（まくじき＝まっしぐら）に、向前して、さらに眼を後方にめぐらさず、頭を左右に動かさなかったものが、**これはと言って、踏み止まって、自己を見、環境を見まわす――これが反省である。すなわち今までの向こう見ずを否定することである。これは人間にのみ許された特権である**。…

3. 『平家物語』を通じて鎌倉時代の日本人はいかなる様態で、霊性的に覚醒しつつあったかを見ることが出来る。著者は誰であってもよいが、とにかく彼はその時代における霊性の動きに触れている。…

4. 浄土系思想は今生（こんじょう）の否定を発足点（ほっそくてん）としている。今生の否定は必ずしも浄土往生の義ではないが、**とにかくそれは今日の生活に対しての厳粛な批評なることにおいては疑いを容（い）れない**のである。

5. 平安時代においても、浄土往生思想はあった。しかしそれは 現世の延長という形で考えられていた。その時代の人々は現世に対してなんらの反省も批判も否定もなかったのである。もしあったとしても、それは概念的なものであった。しからざれば教学的に人真似的に取り扱われるに過ぎなかった。**深刻な人生経験に根ざしたものではなかった**。日本人の霊性的生活はいまだ抬頭していなかった。

6. 平安期の浄土系思想と鎌倉期との相異は、実に外から加えられたものと、内から発生したものとの相異である。… 法然出世の意味をここに求めなくてはならない。

7. よほど天賦に恵まれているものでない限り、平安期から鎌倉初期にかけての公卿（くぎょう）たちの間には、霊性的生活の動きを見ることが出来なかった。色々の仏典が読誦（どくじゅ）せられ、講釈せられ、仏像が拝まれ、諸種の儀式祭典が営まれても、それは一種の文化的遊戯と考えても差し支えないものであろう。…

8. それが平家の没落につれて、人生の浮沈（ふちん）、かねて戦争の悲惨なる事実に当面して来ると、大宮人も僧侶も、**真剣にならなくてはならなかった。一例を挙げると、平重衡（たいらしげひら）の場合がそれである**(『平家物語』巻十、戒文)。

平重衡［1157-1185］：平清盛の五男。[平氏政権](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B9%B3%E6%B0%8F%E6%94%BF%E6%A8%A9)の大将の一人として各地で戦い、[南都焼討](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%97%E9%83%BD%E7%84%BC%E8%A8%8E)を行って[東大寺大仏](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%B1%E5%A4%A7%E5%AF%BA%E7%9B%A7%E8%88%8E%E9%82%A3%E4%BB%8F%E5%83%8F)や[興福寺](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%88%88%E7%A6%8F%E5%AF%BA)を焼亡させた。[治承・寿永の乱](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B2%BB%E6%89%BF%E3%83%BB%E5%AF%BF%E6%B0%B8%E3%81%AE%E4%B9%B1)（源平合戦）においては[墨俣川の戦い](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A2%A8%E4%BF%A3%E5%B7%9D%E3%81%AE%E6%88%A6%E3%81%84)や[水島の戦い](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B0%B4%E5%B3%B6%E3%81%AE%E6%88%A6%E3%81%84)で勝利して活躍するが、[一ノ谷の戦い](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%80%E3%83%8E%E8%B0%B7%E3%81%AE%E6%88%A6%E3%81%84)で[捕虜](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%8D%95%E8%99%9C)になり、[鎌倉](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%8E%8C%E5%80%89)へ護送された。平氏滅亡後、南都衆徒の要求で引き渡され、[木津川](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%A8%E6%B4%A5%E5%B7%9D_%28%E4%BA%AC%E9%83%BD%E5%BA%9C%29)畔で[斬首](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%AC%E9%A6%96%E5%88%91)された。

（以下、『平家物語』からの引用）

9. 関東へ下向せらるべきに定まりしかば何の憑（たの）みも弱り果てて、よろず心細う、都の名残も今更惜しゅう思われける。… ［人に頼んで、法然上人との面会が許される］

10. 泣く泣く申されけるは、「このたび生きながら捕われて候いけるは、再び上人の見参（けんざん）に罷（まか）り入るべきにて候いけり。

11. **さても重衡が後生いかが候べき。身の身にて候いし程は、出仕（しゅっし）に紛れ、政務にほだされ、驕慢（きょうまん）の心のみ深くしてかえって当来の昇沈を顧みず。況（いわ）んや運尽き、世乱れてより以来（このかた）は、ここに戦い、かしこに争い、人を滅ぼし身を助からんと思う悪心のみ 遮（さえぎ）りて、善心はかつて発（お）こらず**。

12. なかんずく**南都炎上**の事は、王命といい武命といい、君に仕え世に随う法逃れがたくして、衆徒の悪行を静めんが為に罷（まか）り向って候いし程に、不慮に伽藍の滅亡に及び候いし事、力及ばぬ次第にて候えども、時の大将軍にて候いし上は、責め一人に帰すとかや申し候なれば、重衡一人が罪業にこそなり候いぬらめと覚え候。かつはかように人しれずかれこれ恥をさらし候も、しかしながらその報いとのみこそ思い知られて候え。

13. 今は首（かしら）を剃り、戒を持（たも）ちなんどして偏（ひと）えに仏道修行しとう候えども、かかる身に罷（まか）り成って候えば、心に心をもまかせ候わず。今日明日とも知らぬ身の行くえにて候えば、いかなる行を修しても、一業助かるべしとも覚えぬこそ口惜しゅう候え。

14. **つらつら一生の化行を思うに、罪業は須弥よりも高く、善業は微塵ばかりも蓄えなし**。かくて空しく命終りなば、火・血・刀の苦果、敢えて疑いなし。願わくは上人慈悲を発こし、憐みを垂れて、かかる悪人の助かりぬべき方法候わば示し給へ」。

15. そのとき上人涙に咽（むせ）びて、暫（しばし）は物も宣わず。やや久しゅうあって、

16. 「**誠に受け難き人身（にんしん）を受けながら、空しゅう三途に帰り給わん事、 悲しんでもなお余りあり。然るを今穢土（えど）を厭い、浄土を願わんに、悪心を捨てて善心を発こしましまさん事、三世の諸仏も定めて随喜し給うらん**。

17. それについて出離の道まちまちなりといえども、末法濁乱（まっぽうじょくらん）の機には、称名を以て勝れたりとす。…

18. 罪深ければとて、卑下し給うべからず。十悪五逆回心すれば往生を遂ぐ。功 徳少なければとて、望みを絶つべからず。一念十念の心を致せば来迎す。専称名号至西方と釈して、専ら名号を称すれば、西方に至る、念々称名常懺悔と演（の）べて、念々に弥陀を唱うれば、懺悔するなりと教えたり。…

19. 重衡が始めて法然に会ったのは、いつであったかわからぬにしても、その時と今囚われの身として吾妻（あずま）下りの時とは、彼の心境において天地の差があったに相違ない。彼は「後生いかがし候べき」と当時の人々の口振りを――今日でもまだそうであるが――殊勝気（しゅしょうげ）に繰り返しても、それは必ずしも極楽に生まれようというのではない。「悪心のみ遮りて善心はかつて発こらず」 と言い、「いかなる行を修しても、一向助かるべしとも覚えぬこそ口惜しゅう候え」と言う彼は、必ずしも地獄へ往くことを恐れたのではない。これはむしろ彼が人生に対する批判であると見た方がよいのである。

20. 「驕慢の心のみ深くして、かえって当来の昇沈を顧みず」というのは、**生活に対してなんらの反省もなく、萎々随々地［他人に追従して自分の腰がきまらないさま］にその日暮らしの動物性を肯定した**ということである。こういうくらし方をやっているものが「悪人」で、それが「助かりたい」というところに、霊性的な何かが閃めき出たのである。

21. これはなるほど「悪人」重衡の真剣な告白である。「三位の中将」である限り、 彼はこんな告白をなし得ない。もしなし得たとしても、それは口真似でしかあるまい。ここに平安期と鎌倉期との相異があるのである。

２　鎌倉武士の念仏

22. 蓮生房（れんせいぼう）熊谷直実（くまがいのなおざね）の発心のごときもまた好一例である。…

23. 今まで浮世を享楽的にまたは殺伐一方で暮して来たものが、頭を丸めて、珠数 爪繰（つまぐ）っていると、いかにも殊勝気に見えて、風流三昧の優しみがある。審美的に感性的に面白いが、それは畢竟（ひっきょう）ずるに虚偽である。霊性的生活よりよほど隔たったものである。

24. この点では蓮生坊のごときは戦国の武士として人生に対して真面目な考えを持った人々の一人であるといってよい。平敦盛（たいらのあつもり）との経緯（いきさつ）は、ともあれかくもあれ、直実が自分の生活に向って厳粛な批判を下したということだけは本当である。彼が詠んだと伝えられる、左記二首の和歌のごときは、彼が心掛けの並々でなかったことを示して余りある。

25. いにしえの鎧にまさる紙衣　風のいる矢も通らざりけり

また曰く、

26. **約束の念仏は申して候よ　やろうやらじは弥陀のはからい**

27. 後者のごときは武人の心構えそのものを赤裸に出しているといってよい。弥陀の本願にまかせて念仏を称えている自分、それで極楽往生が出来るものか、出来ないものか、それは自分の計らいできまるのでない、阿弥陀の計らいであるから、いずれなりと、あなたまかせだという心持ちは、他力信者のそれではないか。

28. また武人として約束はどこまでも守る、その結果がどうあろうと、それはこちらで知ったことでないというのは、いかにも関東ものの律義性を発揮しているではないか。それから鎧袖（がいしゅう）を紙衣に着替えてからは、いかに無常の風が放つ矢面でも、何の恐れることもあらばこそ、というのも、蓮生坊の今の境涯を よく言い現わしている。